

別冊『呼吸器ジャーナル』

COVID-19 の病態・診断・治療

現場の知恵とこれからの羅針盤

小倉高志【編集】

評者

藤田次郎

琉球大学大学院感染症・呼吸器・消化器内科学（第一内科）

医学書院から別冊『呼吸器ジャーナル』として『COVID-19の病態・診断・治療 — 現場の知恵とこれからの羅針盤』という本が出版された。多くの臨床医の興味を引きつけるテーマである。私自身、『呼吸器ジャーナル』の編集、および執筆に携わったことがあるものの、これまでの企画とは異なるスタイルの本であると感じた。

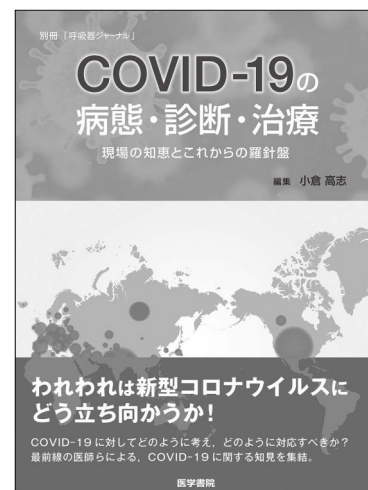
まず、I章ではCOVID-19に関する総論を、II章ではCOVID-19を理解するために必要な基礎知識を示している。III章では、各論として疫学・診断・治療を示している。これらの章からCOVID-19に関する基礎知識を学ぶことができる。なかなか見ることができない病理像まで紹介されている点に感心した。また臨床医の関心の高いワクチンの開発状況も参考になった。

ユニークなのはIV章以降である。まずIV章では「COVID-19に対する治療薬剤の臨床試験の論文を極める」をテーマとし、治療に

関する最新の知見を紹介している。内科医の立場と統計家の立場から解説されている点が興味深い。V章では「COVID-19時代に疾患管理はどのように変わるのか」をテーマに、さまざまな基礎疾患の視点から疾患管理を具体的に示している。

さらに実践的な知識として、VI章では「各施設はどのようにCOVID-19を診断・治療していたのか」というテーマで国内10施設の治療経験を紹介するとともに、米国の状況も紹介している。特にVI章はこれまでにない斬新な企画であり、多様な症例提示に加えて、各施設における院内感染対策についても紹介されている。異なる医療体制を有する施設ごとの感染対策の工夫は大変参考になった。

VII章を担当している河野修興先生の格調高い文章にも感銘した。「新規に出現した疾患に対して、どのように考えどのように対応すべきか」というテーマで展開し、



最後に「コロナ禍への対応、世界は一つ、されど、それは己の棲める処で行え！」という言葉で締めくくっている。厚生労働省から発刊されている診療の手引きにおける重症度分類に加えて、COVID-19診療におけるKL-6の意義についてもKL-6の開発者の立場で紹介している。

本特集は、ユニークな視点での企画も含めて、極めて充実した内容になっている。これは編集を担当された小倉高志先生の高い臨床能力と、幅広い人脈をお持ちであることによると感じた。呼吸器内科医のみならず、すべての臨床医にお薦めできる良書である。

A4変・頁240

2021年1月

定価：5,280円(本体4,800円+税)

[ISBN978-4-260-04585-8]

医学書院刊